北名古屋市議会事務局
分類
29. 12. -7
第　号受付
司・市・一部否・一時否 1・3・5・10・未

平成２９年１２月７日

北名古屋市議会議長
永　津　正　和　様

会派名　公明党

代表者　猶木義郎

議員名　猶木義郎

視察・研修報告書

政務活動費により視察・研修のため出張いたしましたので、下記のとおり報告します。

記

参加議員名	猶木義郎　齊藤裕美	
日　程	平成２９年１１月８日から　１１月１０日まで　３日間	
月　日	視察・研修先	視察・研修概要
11・8	（移動のみ）	
11・9	那覇市　沖縄県立武道館	第７９回全国都市問題会議 基調講演・主報告・一般報告
11・10	同上	同会議パネルディスカッション

旅費合計	交通費	宿泊費	土産代	通信費	参加費	その他
150,266 円	67,760 円	52,000 円	円	円	20,000 円	10,506 円

調査報告

第７９回全国都市問題会議

テーマ
ひとがつなぐ都市の魅力と
地域の創生戦略」
～新しい風をつかむまちづくり～

成果と所感

報告１　基調講演「多様性のある江戸時代の都市」

東京大学史科編纂所教授 山本博文氏

江戸時代のまちについてどのように発展していったのかを説明。
江戸時代のまちづくりを参考に現代と比較して説明された。
城下町が発展した仕組みや「三都」（江戸・京都・大坂）の発展の仕組みなども説明されました。
流通網が発展することにより日本海航路も発展し港町も整備され、それが現代にも活用されている。その事を踏まえ今後のまちづくりの参考にとの講演だった。

報告２　主報告「ひと つなぐ まち 新しい風をつかむまちづくり」

沖縄県那覇市長 城間幹子氏

那覇市の人口は３１万人。人口密度が高い。都道府県庁所在地で全国４番目の高さとなっている。
生活保護世帯の中学生に対する無料塾を開設するなど、子どもにより添い、支援員の配置、奨学金の３月支給等多岐にわたる子育て支援制度も創設されている。
沖縄県は現在、健康問題がクローズアップしており長年、男女とも長寿日本一だったが、しかし現在は一位から転落し新たな健康づくりにも取り組まれている。 健康づくり協力店を募集し健康食の提供などにも取り組んでいるとの事。

最後にこれからの都市像について、地域コミュニティの担い手不足があり、自治会の役員のなり手が少なく悩みはあるものの、「目指す将来像」をしっかり提案しながら進めているとの事。36 校区で町づくり協議会ができ、点から線へ。そして線から面へと取り組みの広がりを進めていきたいと述べられた。
福祉施策は本市にとっても参考となるお話を聞くことが出来ました。

報告３　一般報告「人口減少社会の実像と都市自治体の役割　ー人口インフラの適正な持続的配置はいかに可能か？ー」

首都大学東京学院人文科学研究科准教授 山下祐介氏

山下氏は地方消滅から地方創成へ東京一極集中と人口減少社会の中で、国家と地方のバランスが崩れていると指摘。
地方再生といいつつ本社機能が首都（東京）に集中している。
若者が魅力を感じるのは物価など高くても首都に魅力を感じている現実。
またその首都でも暮らしと経済のバランスが悪いと指摘。
バランスが悪いから行政に頼る傾向がある。しかし少子化が止まらない
今ここで行政依存からの脱却が必要であると指摘。
東京一極集中や権力が集中する現実を変えるのはかなり難しい。
不安の悪循環に陥っているのではないか？
団塊の世代が高齢者になる時代。ますます大都市圏に人口増加現象に拍車がかかるのではないか。
後に人口減少社会に向き合うことが最大の課題であると指摘され、住民参加と連携、協働の取り組みが重要であると述べられた。

報告４　一般報告「事前と都市が融合し共生が地域の価値を高めるまちづくり」

北海道釧路市長 蝦名大也氏

蝦名市長は世界一級の観光地づくりの取り組みで「観光立国ショーケース国立公園満喫プロジェクト」を紹介された。
釧路市では平成１９年「釧路市観光振興ビジョン」の策定、平成２０年に「総合計画」、平成２４年に「釧路市都市経営プラン」、平成 27 年に「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し人口減少に歯止めをかけることを最終課題にした取り組みを進めている。
目標指標を設定し自然を生かした環境づくりに取り組まれている。
大自然の中に身を置きながら利用の拡大を図る取り組み。
また「長期滞在（ちょっとくらし）」の推進に取り組んでいる。

釧路市への移住や二地域居住、避暑、滞在観光、文化芸術活動を希望している方に備え付け可能な施設を提供することによって釧路市での生活体験をしてもらうというもの。自然を生かした取り組みについての講演だった。

報告５　一般報告「新たなステージに入った沖縄観光―複合的な魅力を有するハイブリッドリゾートへ―」

琉球大学観光産業科学部長・教授 下地芳郎氏

沖縄への観光の目的は53%がレジャー。知人訪問等が27%。ビジネスが14%となっており訪日外国人も約２割はビジネス目的であり、そのことを踏まえて観光事業を考える必要があるとされた。
また沖縄の観光の歴史にも触れられ、戦後1975年に開催された「沖縄国際海洋博覧会」が転換期となったとの事であった。
那覇空港や高速道路の整備、首里城の復元など取り組まれた。
さらに音楽、食、芸能などの評価も高いともいわれている。
そのほか修学旅行の誘致や沖縄サミット、ＬＣＣの普及や大型クルーズ船を誘致することによって外国人観光客も増加し、官民一体となった取り組みに効果があがっている。
歴史的経過から「琉球」「日本」「中国」「アメリカ」という４つの顔を持つ都市であり日本とアジアを結ぶ拠点としてこれまでの取り組みに加え「観光は平和へのパスポート」として位置づけ平和研究の取り組みに期待したいと述べた。

報告６　パネルディスカッション　「ひとがつなぐ都市の魅力と地域の創生戦略―新しい風をつかむまちづくり―」

コーディネーターに早稲田大学理工学術院教授 後藤春彦氏
パネリストに㈱能作の能作千春氏。まちとひと感動のデザイン研究所代表の藤田とし子氏、沖縄文化芸能振興アドバイザーの平田大一氏、福井県勝山市長の山岸正裕氏、静岡県島田市長の染谷絹代氏が務められた。
パネリストからは地方創生の様々な取り組みを紹介。民間と行政の協働で地域の特性を生かした創意工夫が重要であることを強調されていた。
今後の活動において非常に参考になった２日間の会議であった。

以上

行政視察報告書

北名古屋市議会　公明党　齊藤裕美

第79回　全国都市問題会議

期　間：平成29年11月9日（木）・10日（金）
会　場：那覇市　沖縄県立武道館

ひとがつなぐ都市の魅力と地域の創生戦略

－新しい風をつかむまちづくり－

【 議題解説 】

1.はじめに

“都市の魅力”、“ひとがつなぐ”、“地域の創生”という、テーマに内包されたまちづくりのキーワードについて考え、議論を進めていくうえでのきっかけとしたい。

2.何が都市を魅力的にするか

（1）都市の魅力とは何か

“都市”＝「ひとが集う場所」
“魅力”＝「ひとを引きつける力」
“都市の魅力”＝「都市がもつ、ひとを引きつけ、集わせる力の総体」
具体的にどのような機能が集積し、都市の魅力を形作っているのか。

－都市の魅力を形作っているもの－

① 経済的魅力
② 生活的魅力
③ 文化的魅力
④ 社会的魅力

（2）来訪者にとっての魅力
―訪れたい都市となる要素―

① 経済的魅力… 商用旅行
② 生活的魅力… 娯楽施設やイベントの存在
公共交通の整備、都市へのアクセスの確保
③ 文化的魅力… 観光旅行
④ 社会的魅力… その地域住民との「交流」そのもの

（3）住民にとっての魅力
―活躍できる都市、住みつづけたい都市となる要素―

“住民にとっての都市の魅力”＝「活躍できる都市」、
「住みつづけたい都市」

「活躍できる都市」となるために必要な要素

①経済的魅力… 魅力的な雇用の創出や起業支援など、住民が仕事を通して自己実現を図ることができる環境の整備が重要となる。

「住みつづけたい都市」となるために必要な要素

① 生活的魅力…都市計画や道路・インフラの整備等による快適な住環境の確保、子ども・子育て支援や高齢者福祉などライフステージに応じた医療行為・福祉の充実、バスや鉄道等の公共機関網の構築は、都市の生活的魅力を高めるうえで欠かせない。
②文化的魅力… 芸術や文化に身近に接し、質の高い教育を受け、生涯学習の機会に恵まれるなど。

「活躍できる都市」、「住みつづけたい都市」となるために必要な要素

① 社会的魅力… 近隣住民との親睦、趣味を同じくする人との交流、公共的な活動への参加など、多様な社会参加のきかいが存在することなどを通じて、住民が生きがいを感じること。

3.“ひとがつなぐ”ことの意義

(1) ひとのつながりが高める都市の魅力

都市における“ひとのつながり”の力をいかに高め、都市の魅力の創出につなげていくのかが問われている。

(2) ひとがつながって作り出す都市の魅力

現在、多様な主体によって形成されるネットワークのなかで、政策過程を通じて協働が進められることによって、都市の多様な魅力が創り出されている。

今後は、いかにしてひとをつなげ、住民の創意や活動をまちづくりに反映できるのか、協働政策の中身が問われる。

(3) 都市の魅力をひとにつなげる

〈課題〉

1.「開かれたコミュニティ」の形成

2. 都市の魅力を次世代に継承する

3. 都市の魅力をいかにして来訪者に伝えるか

4.地域の創生を目指して

(1) 地域の側から見た“創生”の戦略

地域の魅力を総合的に高めること

(2) 地域の多様性を踏まえた政策展開の必要性

「狭域」と「広域」の政策を重層的に展開する

(3) 地域横断型の政策展開の必要性

分野横断型の行政体制を構築し、住民の参加・協働のもとで地域資源を有効に組み合わせて新たな価値を生み出していくことが求められている。

5.おわりに

地域の創生において、政策の「正解」は存在しない。したがって、地域の特性を踏まえ、いかなる政策が求められているのかを絶えず議論し、また実施している政策が効果を挙げているのかを検証していく

必要がある。今回の会議では、これまで述べてきたような“都市の魅力”、“ひとがつなぐ”、“地域の創生”の含意やそれに関わる多様な視点を念頭に、“新しい風をつかむまちづくり”の方向性について、議論を深めたい。

基調講演

多様性のある江戸時代の都市

東京大学史料編纂所教授　山本博文

1. 巨大都市と多様な町

〈　江戸時代の町の特徴　〉

(1)　都市の巨大化

…江戸・京都・大坂　＝「三都」

「江戸」…徳川家の城下町・幕府の所在地・全国の大名の藩邸
武家人口の飛躍的増加、武家の需要に応じるために
商人や職人の人口も増加した。

「京都」…朝廷の所在地・多くの神社の本山・伝統的な手工芸の町

「大坂」…「天下の台所」と称された
諸国の年貢米が集まった。先物取引が行われた。

(2)多様な街の発展

… 城下町・宿場町・門前町・港町など

封建制度に基づく江戸時代の「幕藩体制」は、大都市の一人勝ちにならない構造になっていた。

2. 参勤交代がもたらしたもの

大名が国元と江戸を隔年に往復する参勤交代の制度は、街道と宿場町の発展をもたらした。江戸幕府は、街道を整備し、宿場を

置き、公用の人馬の提供を義務付けた。

街道や宿場の整備が進んだことで、庶民の旅行も次第に行われるようになった。伊勢神宮や善光寺、金毘羅宮など人気の観光地が各地に成立し、人の移動が活発になった。そうした参詣客を迎えるため、門前町も発展した。

また、全国的な流通網が形成されたため、港町も発展した。

3. 現在に続く町のかたち

江戸時代は、全国各地の多様な性格を持つ町が相互に影響しあって発展した時代であった。

町の発展、人の移動とともに、文化や情報先進的な大都市から地方都市にもたらされ、現在の日本の町の原型を作っていった。

〈都市に望むこと〉

わが町の歴史を知ってアピールをして欲しい。

主報告

ひと　つなぐ　まち

ー新しい風をつかむまちづくりー

沖縄県那覇市長　城間　幹子

1. はじめに

那覇市は、沖縄本島の南部西海岸に位置し、古くから東南アジアの各都市を結ぶ交通の要衝地点として発展してきた。

・那覇空港；乗降客数全国第6位（平成28年）

・那覇港　；クルーズ船寄港回数全国第3位（平成28年）

・那覇市＝「沖縄の玄関口」である。

「アジアとの商業貿易拠点」として注目されている。

・那覇市は中核市。人口密度は、都道府県庁所在地では東京新宿区、大阪市、横浜市に次いで４番目に高い都市である。

≪今後の展望≫

・那覇空港；第２滑走路の増設

・那覇港　；クルーズ船バースの増設、那覇軍港の移設を検討中

2. 那覇市の魅力

・亜熱帯の気候と風土

・アジアとの交流の歴史→沖縄独特の文化が生まれた（三線・空手）

・ユネスコ世界遺産：首里城（ 琉球王国のグスク及び関連遺産群 ）

3. 那覇市の課題と取り組み

(1)　観光客も地元市民も楽しめるまちの創造に向けて

・第一牧志公設市場の建て替え

・農連市場地区の再開発

・新文化芸術発信拠点施設の建設

(2)　新しいコミュニティの力を求めて

・子どもの貧困対策

貧困率が全国平均の２倍

失業率は改善傾向だが非正規雇用率が高く所得水準も低い。

→負の連鎖を断ち切るための様々な施策を展開している。

「こどものみらい応援プロジェクト推進基金」を設置して長期的視点での事業継続を目指している。

・健康長寿の延伸に向けて

長寿県と言われたが今は昔。

平均寿命の全国順位も女性１位から 26 位

男性３位から 30 位。

肥満者の増加・働き盛り世代の死亡率が高い。

行政として、市民の健康長寿の延伸のため取り組みを推進している。

また、市民、関係機関・企業・団体等で構成する「健康づくり市民会議」を設置し、健康意識の向上、健康づくりの実践に取り組んでいる。

・レインボーなは宣言

LGBTを含む性的マイノリティの問題を人権問題と捉えている。

平成27年7月「性の多様性を尊重する都市・なは」宣言
（レインボーなは宣言）を行った。
；全国2例目

平成28年7月　那覇市パートナーシップ登録を開始した。
；全国5例目

・新たな地域リーダーの発掘・養成

「小学校区まちづくり協議会」の設立支援を行っている。

「那覇市協働大使」として委嘱。

「なは市民協働大学」「なは市民協働大学院」を開講している。

4. おわりに　～ 那覇市が目指すこれからの都市像 ～

那覇市は、キャッチフレーズとして、

『平和・こども・未来「ひと　つなぐ　まち」』を掲げている。

アジアに開かれた市として、国内外から優れたヒトやモノが集い、そこから新しいモノやコトの付加価値を生み出すとともに、これらの取り組みが新たな礎となり、ますます魅力ある「ひと　つなぐ　まち」にしていくことで、新しい風をつかみ、さらには、追い風に変え、躍動感みなぎる万国津梁のまち『那覇市』を目指す。

全体所感

今回の会議では、“都市の魅力”、“ひとがつなぐ”、“地域の創生”の含意やそれに関わる多様な視点を念頭に、“ 新しい風をつかむまちづくり” の方向性について、議論がなされた。

「政策の「正解」は存在しない。」と言われるように、わが町の歴史を知りわが町に見合った政策の必要性を学んだ。

那覇市は観光立国をめざせる都市であり、空港と港をもつ大都市であるため、わが市とは人口規模も産業も違いすぎる。そのため、直接取り入れられる政策はないと感じた。

しかし、那覇市長の新しいコミュニティの力を求めての講演の中で「都市化の進展や市民意識の変化などから、市民と行政とを結ぶ核であった自治会は加入率は低下し、会員の高齢化・次世代の担い手不足などの課題が顕著にあらわれてきた。」といわれた。それは、全国的に同じ傾向であり大問題化してきていると共感した。そのため、那覇市の政策にとても興味を覚えた。

「小学校区まちづくり協議会」の設立支援はわが市でも同様の協議会が設置され始まっているが、既存の自治会を解体できず、自治会を越えての連携は、主導権や発言力・実践など自治会の規模による格差が生じている現実があり、継続や発展の難しさを感じている。

那覇市は、まちづくりについて積極的な活動をしている方々に対し、これまでの活動に対する敬意と今後の継続した活動への激励の意を込め「那覇市協働大使」として委嘱している。それは名誉と共に「ありがとう、そしてご苦労さん」と引退勧告をされたかのような市からの感謝状ではなく、ネーミングも委嘱も素晴らしいことだと思った。

“なはを知り好きになる”インターンシップ制度の「なは市民協働大学」「なは市民協働大学院」の開講は魅力的である。

“北名古屋を知りもっと好きになる”大学校の開設を期待したい。その活動により、新たな地域のリーダーが発掘・養成され、地域における新しい風を生み出す人材が育成されることが期待できるのではないか。

以上